

『ヨシュア・オコン：所有について』

第1部：2016年5月12日(木)～14日(土)、東京アートフェア会場内(ブースS01-9)

第2部：2016年5月19日(木)～6月19日(日)、アサクサ

キュレーション：アサクサ 協力：スカイザバスハウス

アサクサでは、メキシコ出身の映像作家ヨシュア・オコンによる東京での初個展『ヨシュア・オコン：所有について』を開催します。作家の指示に基づいたアマチュア参加者による演技、ドキュメンタリーや即興をおり交ぜ、フィクションと現実が交わる状況を作り出すオコンの作品は、ビデオカメラを前に行われる社会実験となり立ち現われます。政治的断層の特異性に分け入り、さまざまな団体の主張とその正当性をめぐる問題を探る映像作品は、現代社会に引き起こる対立を明確にする一方で、独特のユーモアで視点を切り替えるオコンの手法が、一方的な意見の対立を乗り越えた認識の先へと鑑賞者を促していきます。

『ヨシュア・オコン：所有について』と題された本展は二回に分けて構成され、第1部はアートフェア東京の会場内にある個展ブースにて行われます。オコンとサンティエゴ・シエラとの共作《The Toilet》(2016年)は、メキシコの大富豪カルロス・スリム氏と、彼が有するヨーロッパ近代彫刻の膨大なコレクションを背景に、今年2月のZona Macoアートフェアに出展されました。皮肉をもって名付けられたこのデジタルカラージュは、スリム氏が建設したソウマヤ美術館がラグジュアリーな洋式トイレに見立てられ、オーギュスト・ロダンの《考える人》がその上に鎮座しています。南米経済の支配者に対するこの明確な風刺は、反権威主義の実践を描いたもう一つの作品に呼応しています。6チャンネルの映像インスタレーション作品《Hypnosis》(2009年)は、1970年代以降のパンクカルチャーと深い関わりを持つレイモンド・パティボンとの共作であり、ヒッピー時代から30年以上にわたって、反資本のイデオロギーに忠実にベニス・ビーチに住み続ける老人たちの姿を投影しています。前衛の意識が風化し座礁したひとつの極点を示す本作は、アート界における経済活動の力学をその両端から捉える視座を作り出しています。

所有をめぐる考察が土地や領土に向けられる第2部では、会場をアサクサに移し、アメリカ国境を越えたグアテマラ移民を参照する近作2点を紹介します。《Octopus》(2011年)は、グアテマラ内戦の再現映像であり、当時のゲリラ戦闘員によって実演されています。かつては敵対する部隊として戦った彼らも、いまは異国で不法滞在者となり、日雇い労働の仕事を待つ同一グループのメンバーです。撮影は彼らが毎日職を待つロサンゼルス郊外のホームセンターの駐車場で行われ、郊外ののどかな環境の中で架空の敵に対する攻防シーンが繰り返されます。《Oracle》(2015年)では、同伴者のいない児童の密入国受け入れに対して抗議活動を展開するアリゾナ州の極右団体を取材する一方で、作品に参加する子どもたちは米国海軍の賛美歌のパロディーを歌い、グアテマラ経済へのアメリカの侵攻を批判しています。どちらの作品も、実在する多国籍業にちなんで名付けられ、アメリカ国内における公的機関と民間企業との癒着を指摘しながら、周辺国の状況悪化をまねく新自由主義経済の功罪を問うています。

軽妙なジョークから直截な社会風刺まで、オコン作品におけるユーモアは、政治的な攻撃と倫理的な問いかけのためのツールとなって機能しています。「私たちの前世代、つまりモダニズムの精神性はあまりにも深刻に自分自身を規定したために、作品のもつ自己批判性が失われてきた」とオコンは述べています。これらの作品の中で演技をする参加者は、一方では作家からの脚本を強いられ、一方では自らの主張を表明する相反した状況におかれます。それはまた、鑑賞者がおかれた社会的ジレンマを反映し、思考の定点がたえず変動する現代の特性に即して、解釈を保留にし漂流させる鑑賞領域をつくりだしています。

世界各地で強硬な保守主義が支持を集めるなか、本展は次のような疑問を投げかけます。政治のかけ引きにおいて、何かを所有しているという意識がどのような力学を生んでいるのでしょうか。芸術が社会へのさらなる関与を求めるとき、アートコレクターは文化圏を超えたどのような先導的役割を担うのでしょうか。いったい私たちにとってテリトリーとは何でしょうか。それはどこに始まり、どこに終わるのでしょうか。

『ヨシュア・オコン：所有について』第1部は、スカイザバスハウスによる協力によって企画されています。



ヨシュア・オコン《Oracle》2015年、ライトジェットCプリント、150 x 97.8 cm.



ヨシュア・オコン《Oracle》2015年、シングルチャンネル映像(カラー、ステレオ音声)、15分09秒.

アーティスト:

ヨシュア・オコン (Yoshua Okón: 1970年メキシコシティ生まれ)は、脚本化された演技や即興を織り交ぜ、辺境に追いやられたコミュニティの境界線に立って、労働や権力、その正当性について考察する作品で知られる。主な展覧会に、2002年 クラウス・ビーゼンバッハのキュレーションによる『メキシコ・シティ:身体と価値の換金レート』(ニューヨーク近代美術館 PS1、NY およびクストヴェルケ、ベルリン); 2004年 トレバー・スミス、ダン・キャメロンと神谷幸江キュレーションによる『順応行動 (Adaptive Behavior)』(ニューミュージアム、NY); 2008年 サイモン・クリッチリーと片岡真実キュレーションによる『異国語で笑う (Laughing in a Foreign Language)』(ハイワード・ギャラリー、ロンドン); 2014年 ジェシカ・モーガンによる第10回光州ビエンナーレ『バーニング・ダウン・ザ・ハウス』; 2014年『ヨシュア・オコン』(倉敷芸術科学大学内および加計美術館、倉敷)。本年は、クリスチャン・ヤンコウスキのキュレーションのマニフェスタ11(チューリッヒ)に参加予定。主な公立コレクションに、テート・モダン、LACMA、COLECCION JumexとMUACなど。1994年にはミグUEL・カルデロンと展示スペース ラ・パナデリアを創設。2002年、フルブライト奨学金をえてカリフォルニア大学ロサンゼルス校よりMFA取得。

サンティエゴ・シエラ (Santiago Sierra: 1966年マドリッド生まれ)は、日常に隠された権力の構造をあぶりだす作品で知られる。金銭的な報酬と引き換えに、参加者に無意味で不快なタスクを課し、資本主義における搾取と疎外の状況を明らかにする。近年では、2015年ラボラトリー(メキシコシティ); 2013年 クンストハレ・チュービンゲン(チュービンゲン); 2012年 レイキャヴィーク美術館(レイキャヴィーク); 2006年 マラガ現代美術館(CAC、マラガ)で個展を開催。主な公立コレクションに、テート・ブリテン、ヘルシンキ現代美術館、ダウムラー・コンテンポラリーほか。マドリッド・コンプルテンセ大学卒業後、メキシコ国立自治大学サンカルロス学院にて学ぶ。

レイモンド・ペティボン (1957年アリゾナ州タクソン生まれ)は、アメリカ文化の若者文化から、美術史、宗教、政治、セクシュアリティまでの幅広いジャンルに批判を向けるイラストレーションで知られる。DIY精神の先駆者として知られるハードコア・パンク・バンド ブラックフラッグに関係し、1970年代からアルバムカバー、コミック、コンサートのチラシ、Tシャツや同人誌の配布を通じ、独自のジャンルを築く。1998年のシカゴ大学ルネッサンス・ソサエティ(シカゴ)での個展を皮切りに、2005年 ホイットニー美術館(ニューヨーク); ;2006年 クンストハレ・ウィーン(ウィーン)ほか個展歴多数。主な公立コレクションに、ポンピドゥー・センター、ニューヨーク近代美術館、SFMOMA、テート・ギャラリーなど。1977年、カリフォルニア大学ロサンゼルス校にて経済学の学位を取得。

キュレーター:

アサクサ は、ギャラリーキュレーターが運営する、40平方メートルの一般住宅を改築したプロジェクト・スペース。美術研究とマーケットの動向を媒介し、共同キュレーションを推進する。2015年には、倉敷芸術科学大学川上幸之介研究室、ギャラリーエ・タダエス・ロバック、大和日英基金、青山 | 目黒と共同企画を実施。また筑波大学 五十殿利治教授の協力により1920年代日本の前衛作家の足跡を辿るアーカイブ展『1923』を開催。ヨシュア・オコンによる本展は4回目の展覧会となる。本年7月にはトマス・ヒルシュホルンが参加予定。

展覧会情報

タイトル: 『ヨシュア・オコン:所有について』
作家名: ヨシュア・オコン

第1部

会期: 2016年5月12日(木)~14日(土)

会場: アートフェア東京(ブース S01-9)

東京国際フォーラム

住所: 東京都千代田区丸の内3-5-1

入場: 5/12 14:00-21:00, 5/13 12:00-21:00, 5/14

10:30-17:00 *入場チケット 要

第2部

会期: 2016年5月19日(木)~6月19日(日)

会場: アサクサ

住所: 東京都台東区西浅草1-6-16

開廊: 木曜日19:00-22:00、土・日曜日12:00 - 19:00

プレス連絡先: 山越紀子 (Noriko Yamakoshi)

info@asakusa-o.com

090-4673-2745

ART FAIR
TOKYO